

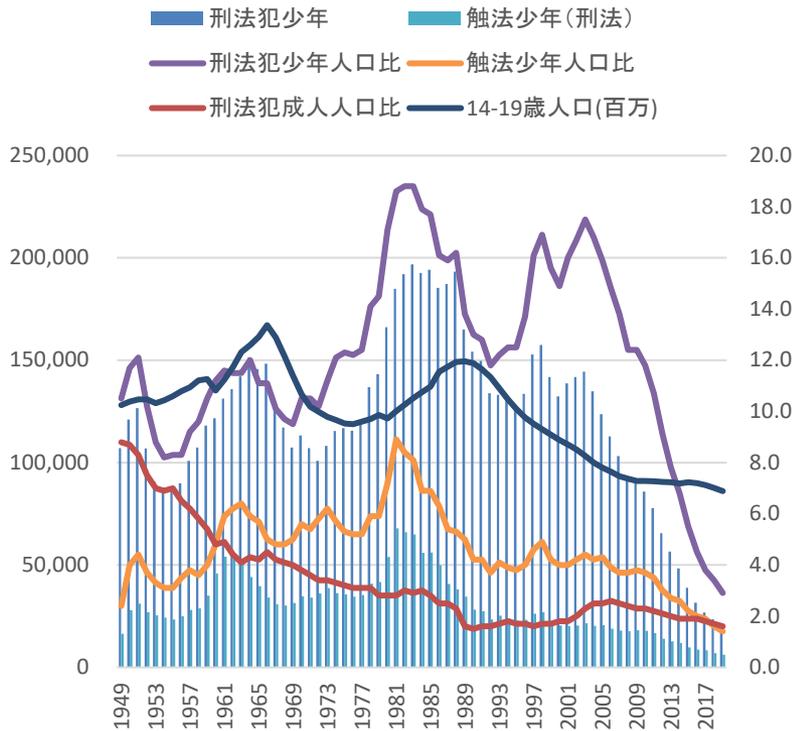
令和3年8月25日（水）
生徒指導提要の改訂に関する協力者会議（第3回）
ヒアリング資料

近年の少年非行

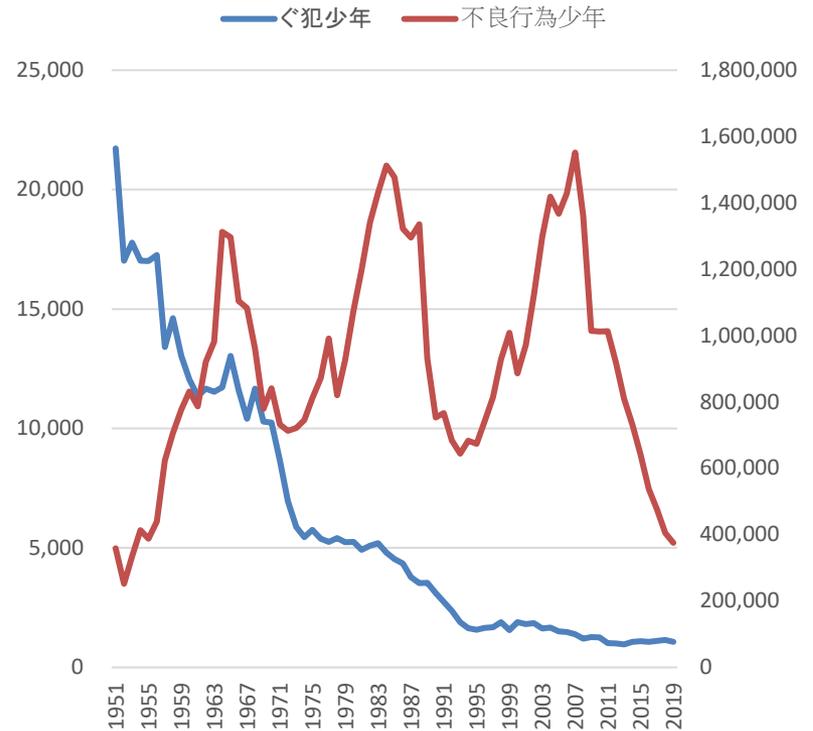
科学警察研究所犯罪行動科学部
宮寺 貴之

少年非行（警察統計）

刑法犯少年、触法少年（刑法）及び人口比等

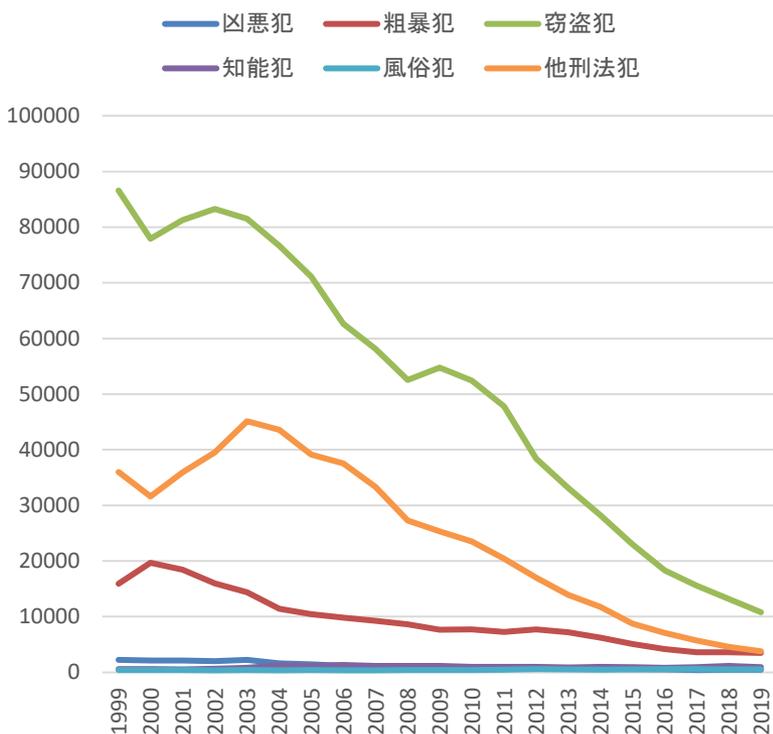


ぐ犯少年及び不良行為少年

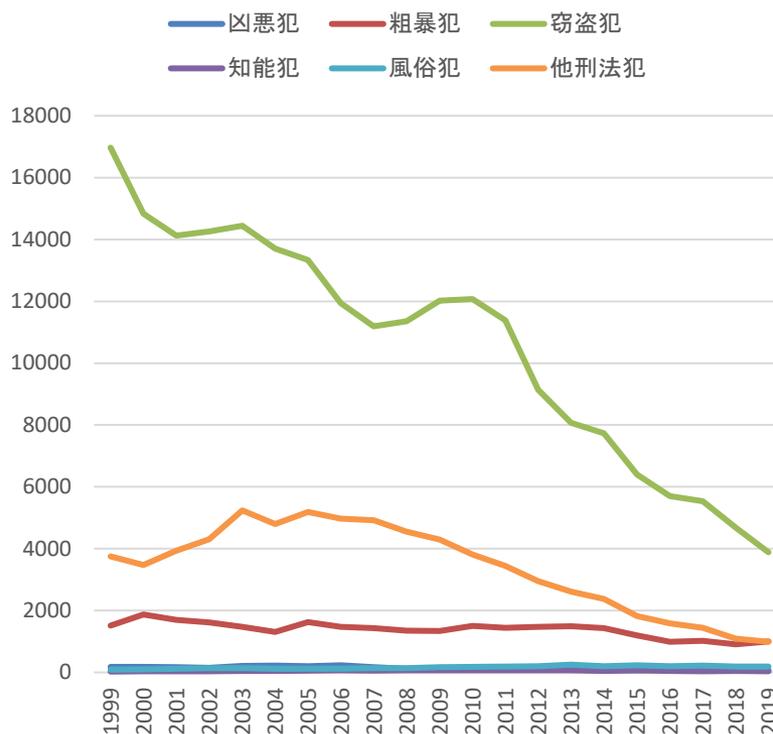


刑法犯包括罪種別

刑法犯少年

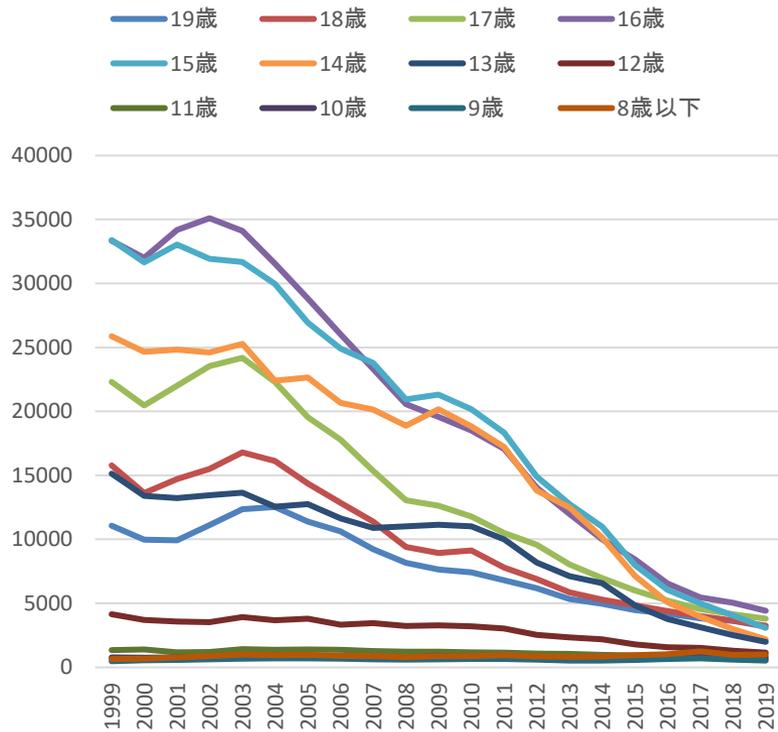


触法少年（刑法）

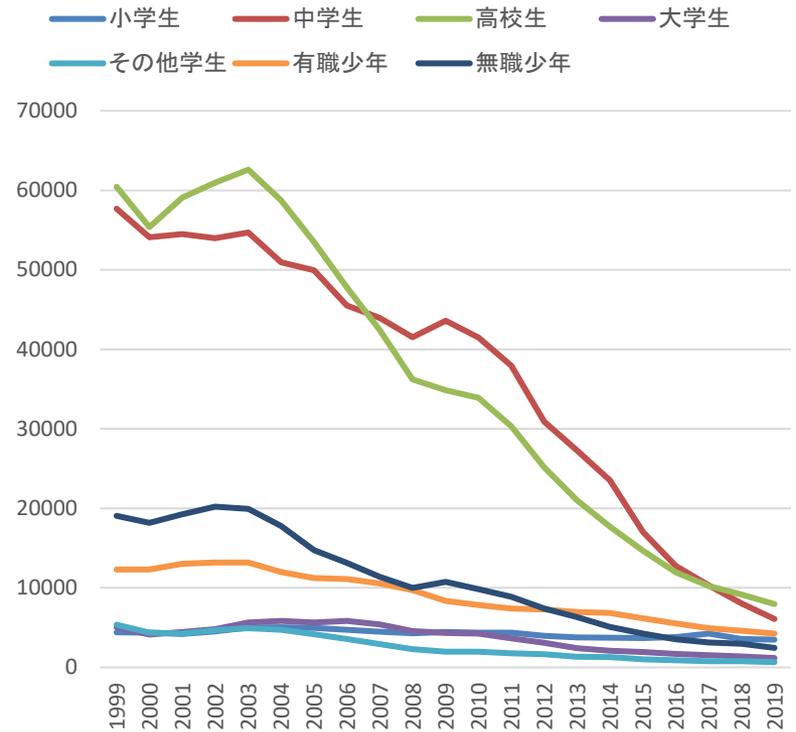


属性別（触法少年込み）

年齢別

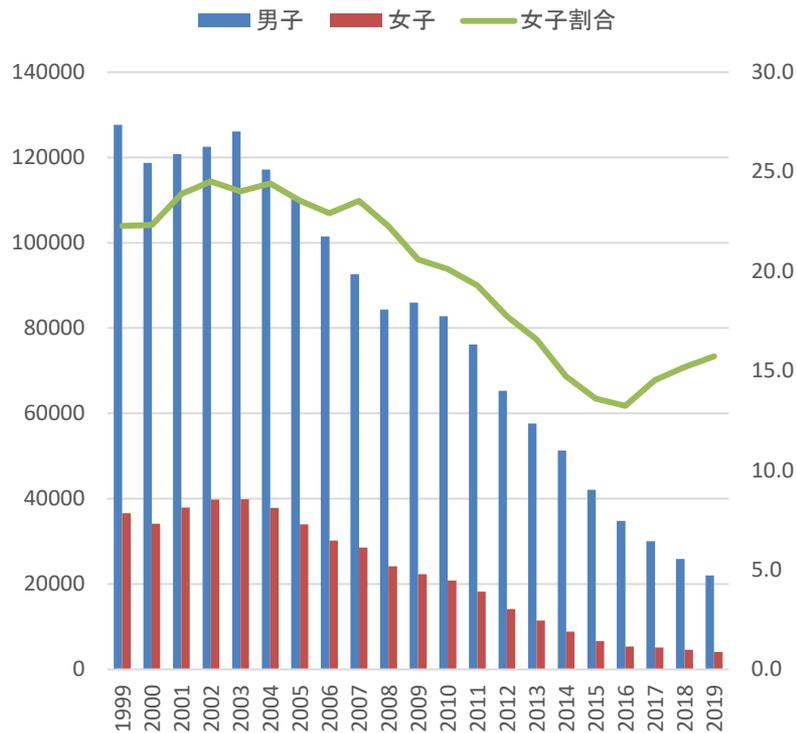


学職別



属性別（触法少年込み）

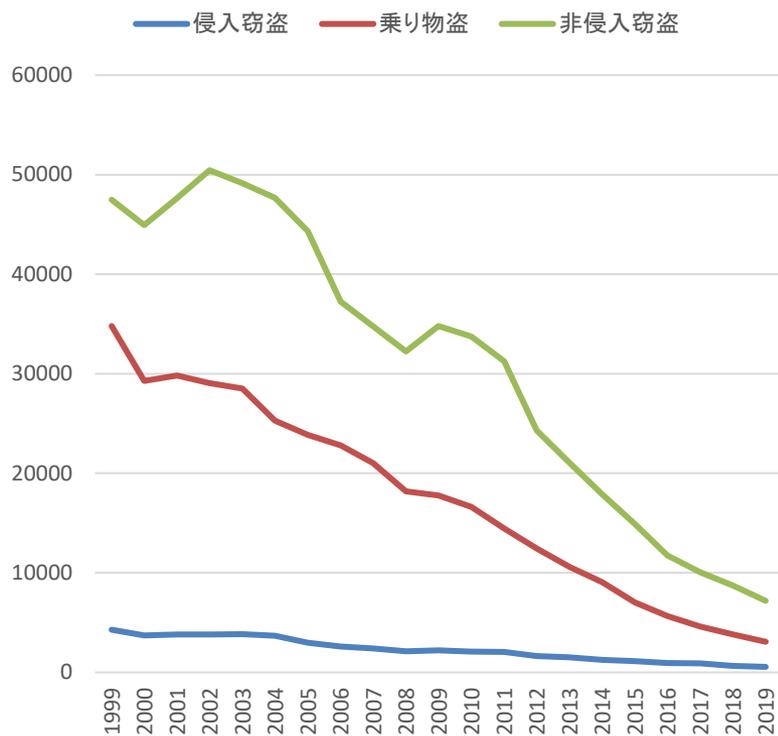
男女別



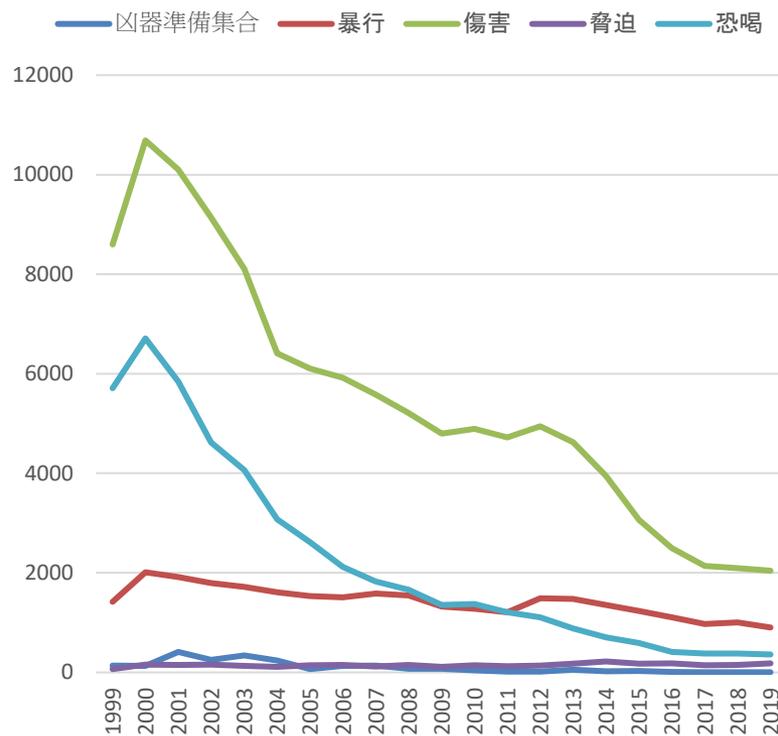
- 近年、非行が減少している
- 中高生の減少幅が大きく、女子の比率も下がっている

罪種別（刑法犯少年）

窃盗犯

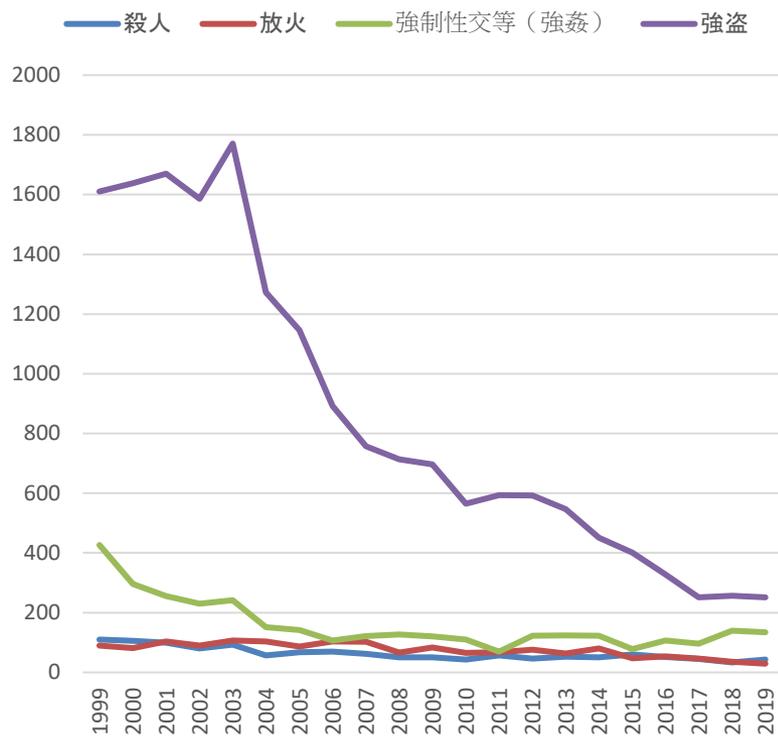


粗暴犯

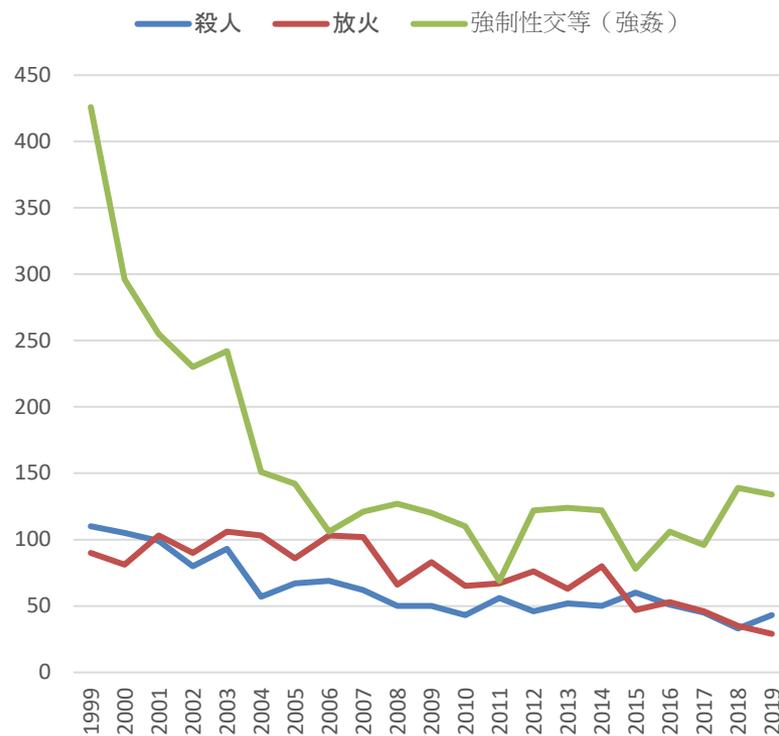


罪種別（刑法犯少年）

凶悪犯

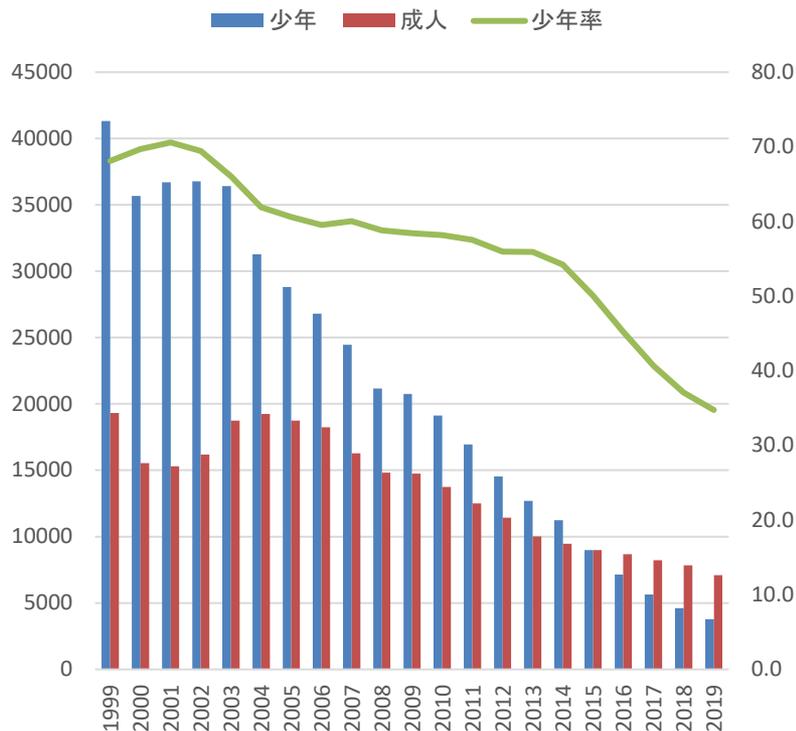


凶悪犯（強盗除く）



街頭犯罪（刑法犯）

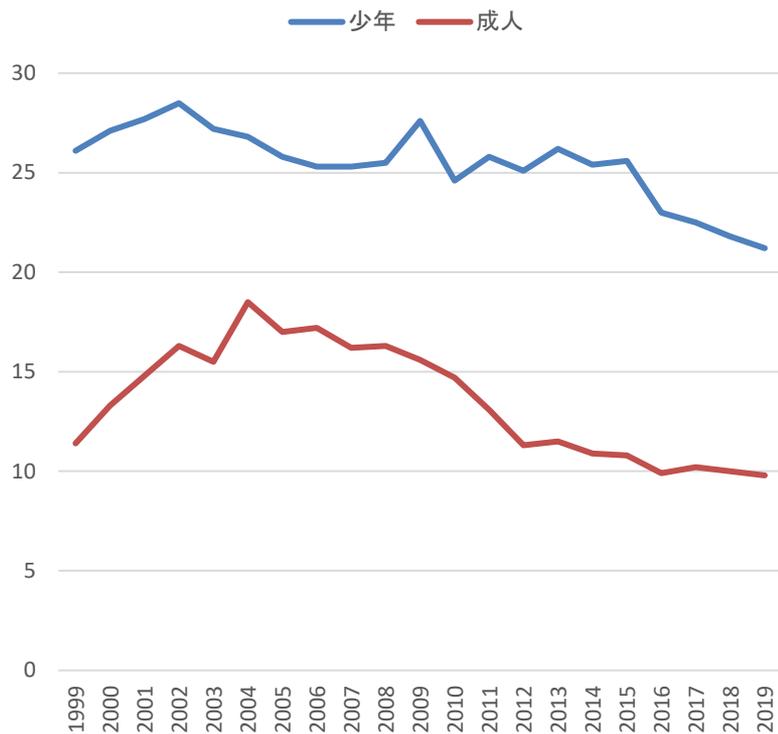
街頭犯罪



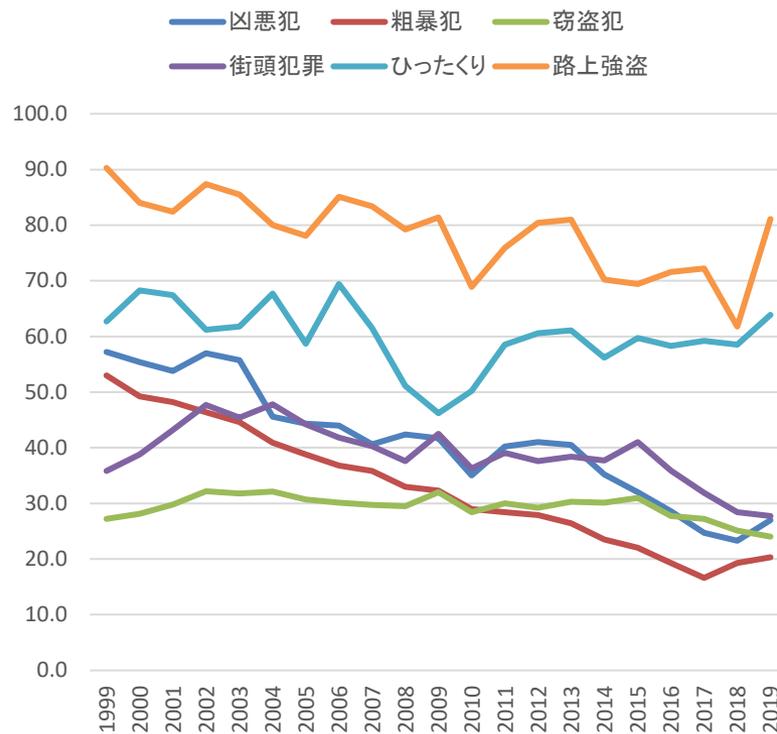
- 刑法犯少年の過半数を占める窃盗犯少年が減少
- 粗暴犯、殺人、強盗も減少傾向にあり、実質的な非行の減少がうかがえる
- 暴行、強制性交等（強姦）は比較的横這い

共犯率

少年・成人別

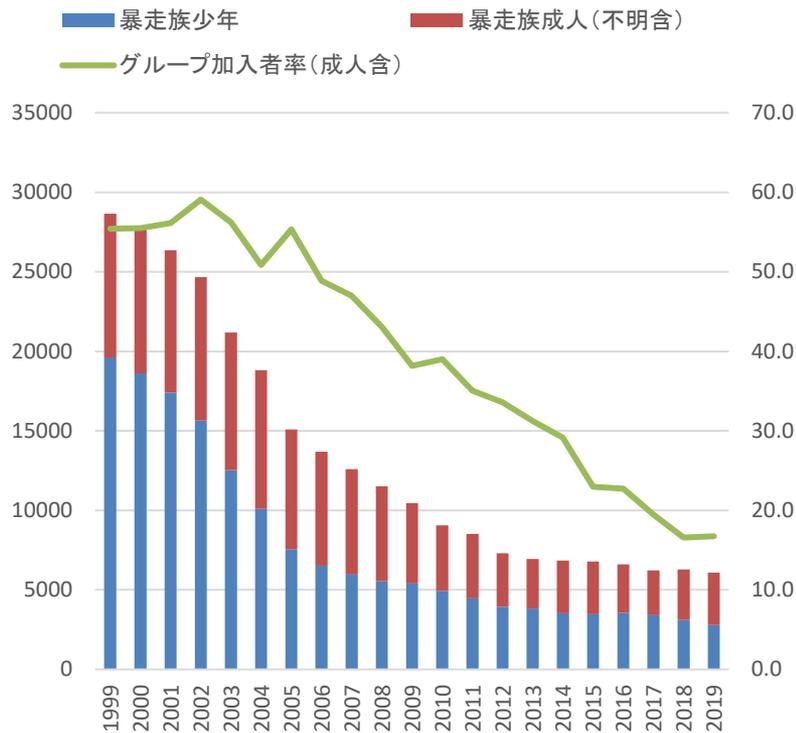


少年罪種別



非行集団

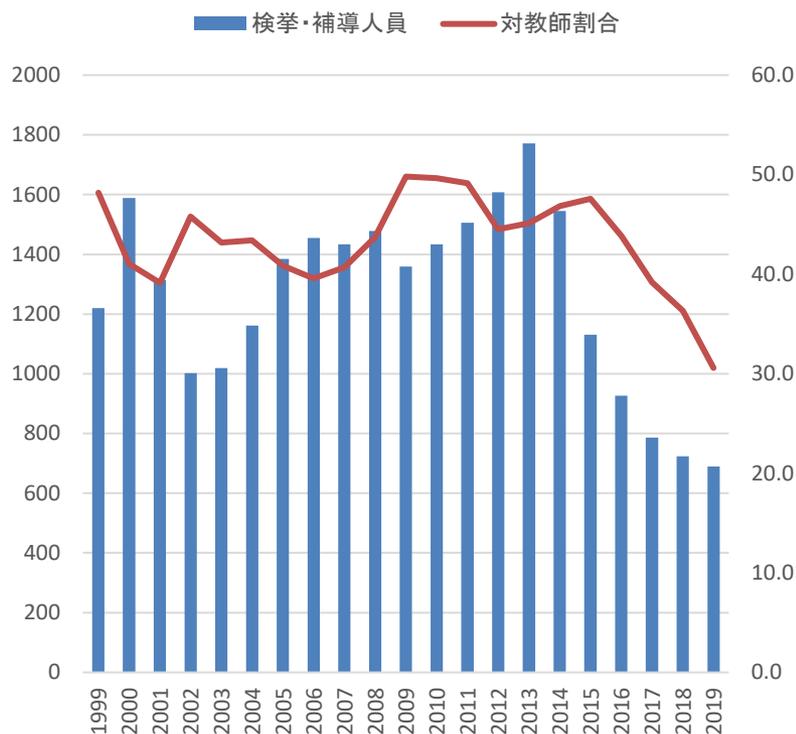
暴走族



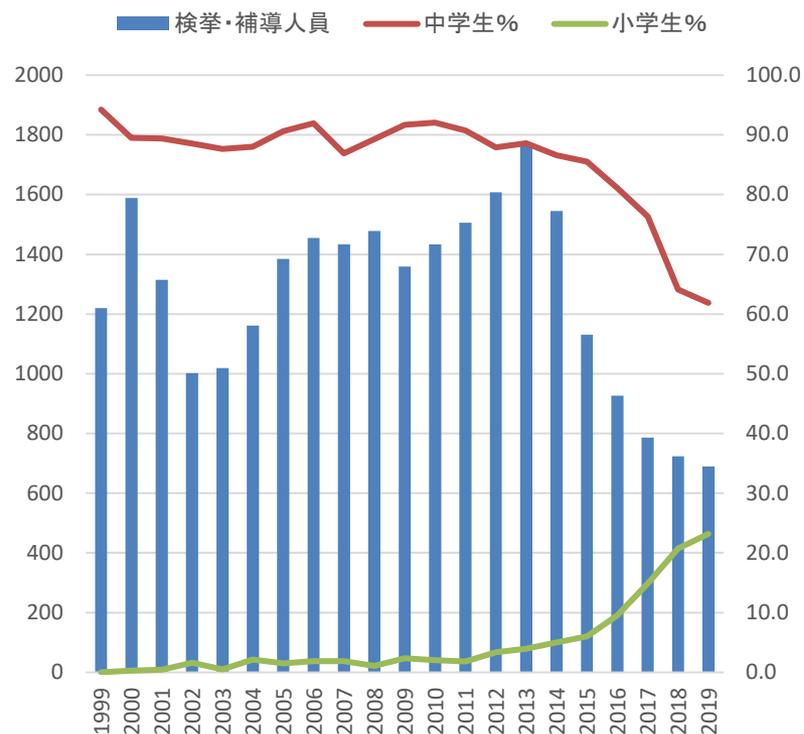
- 少年非行は共犯率が高い
- 街頭犯罪、特に路上強盗やひったくりの共犯率は高い
- 街頭犯罪の減少、粗暴犯・凶悪犯の共犯率の減少
- 暴走族の減少、グループ加入率の減少（含成人）
 - 非行集団の減少
 - 屋外の非行の減少

校内暴力事件

校内暴力（触法少年込み）

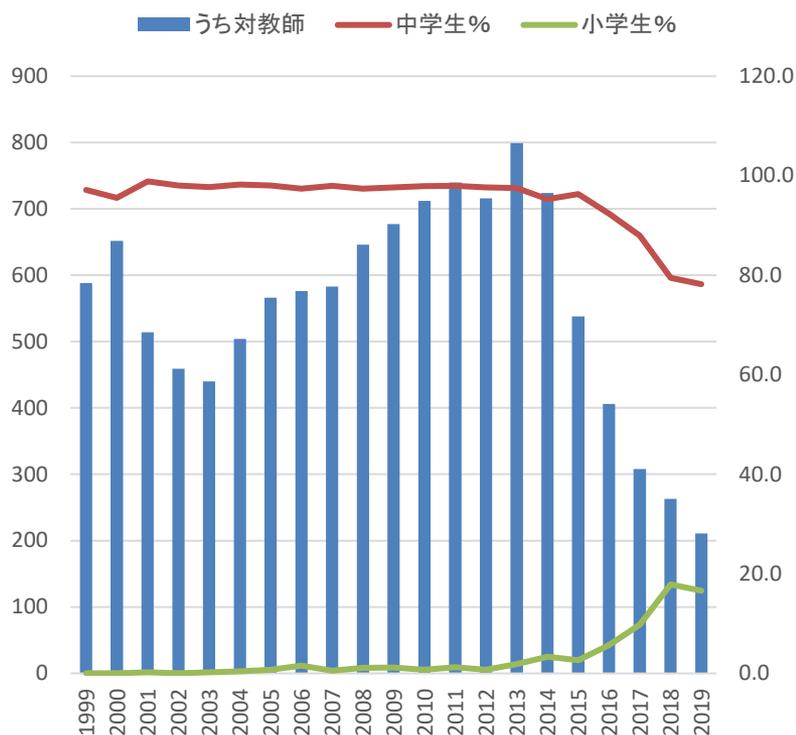


検挙・補導人員における中学生・小学生の割合



校内暴力事件

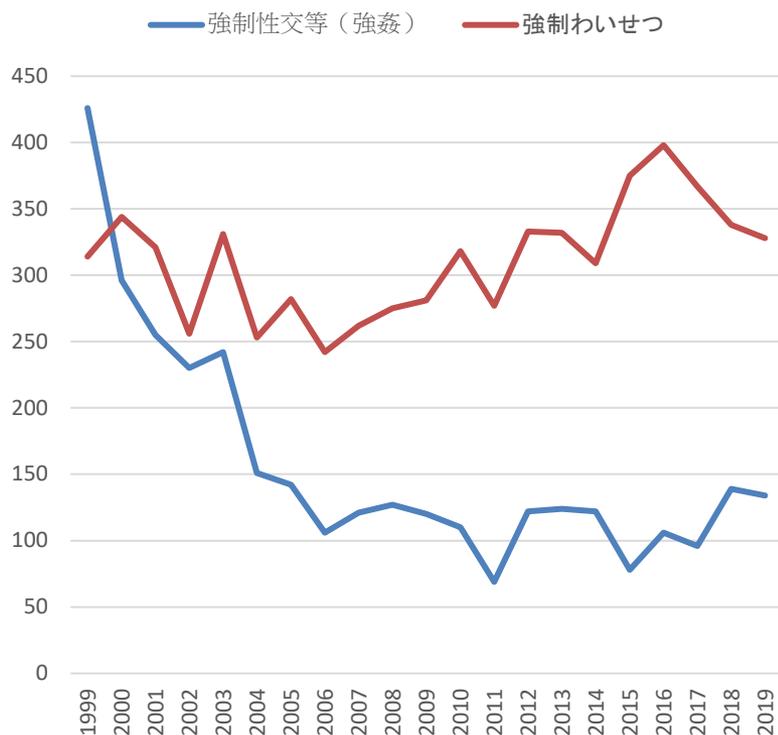
対教師暴力



- 校内暴力事件も減少
- 対教師暴力も減少
- 中学生による事件が減少する一方、近年、小学生による事件の増加が目につく

増加傾向の非行や被害

性犯罪（強制わいせつ）

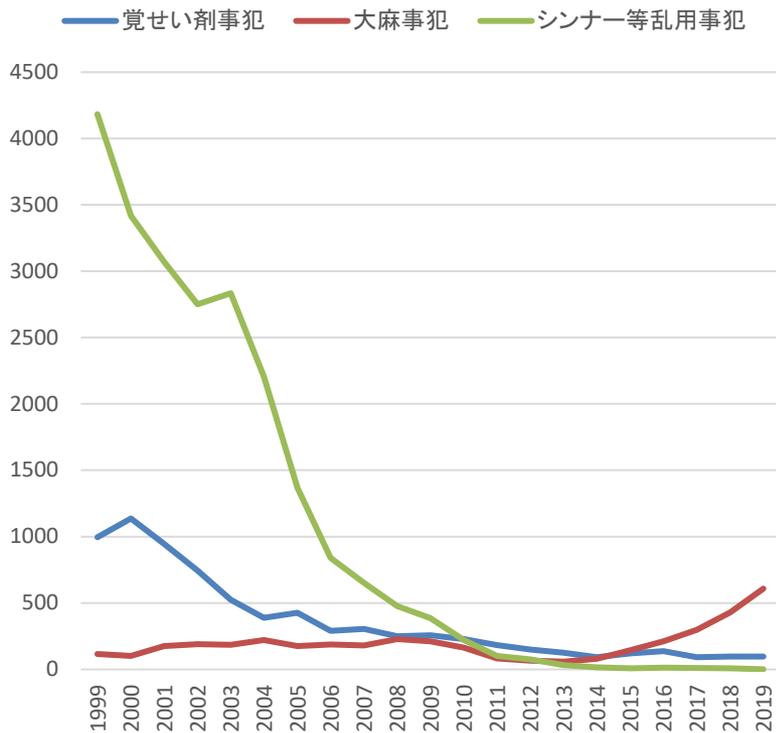


特殊詐欺

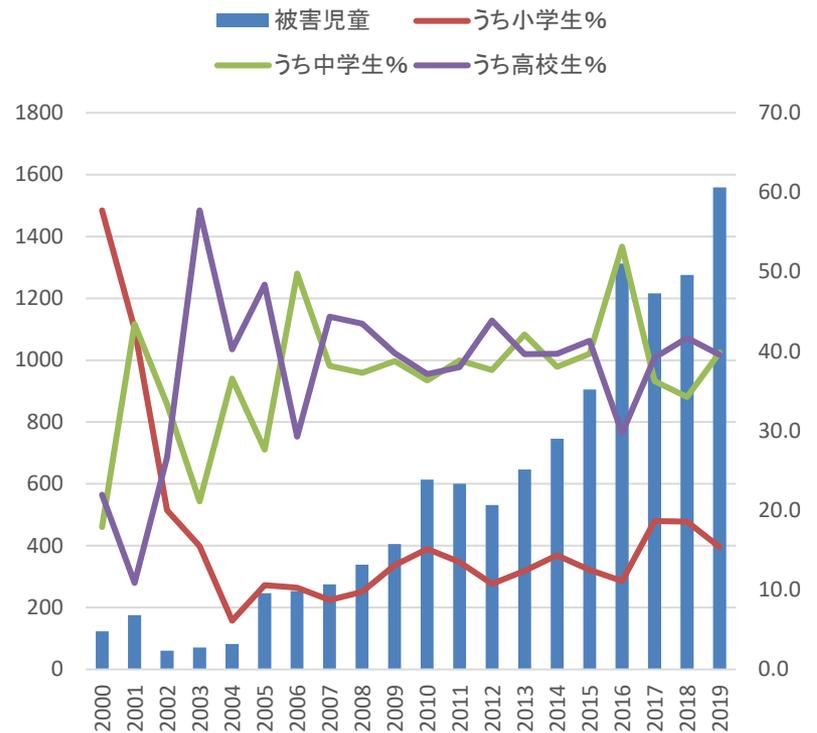


増加傾向の非行や被害

薬物乱用（大麻事犯）

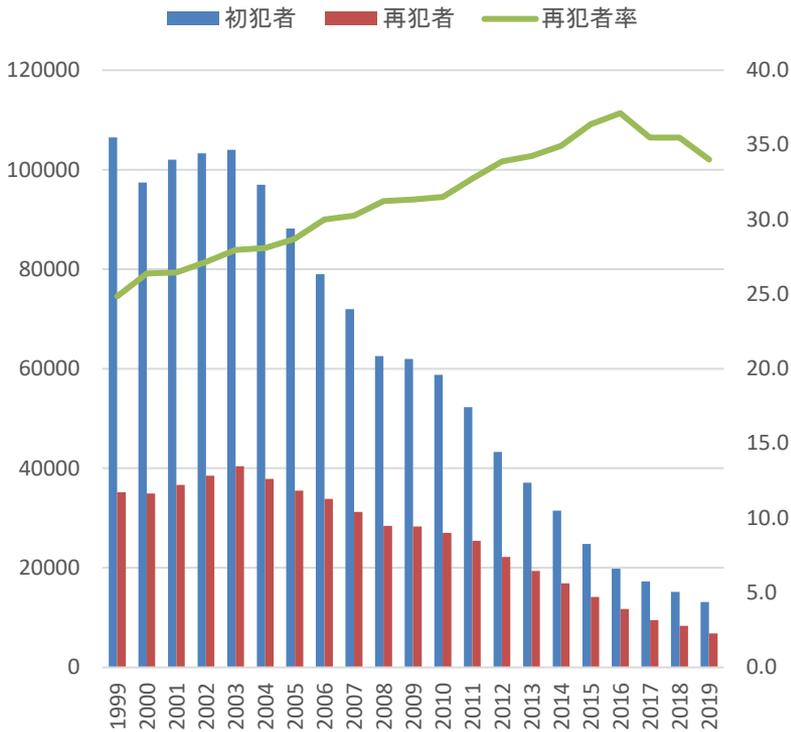


児童ポルノ事犯の被害児童

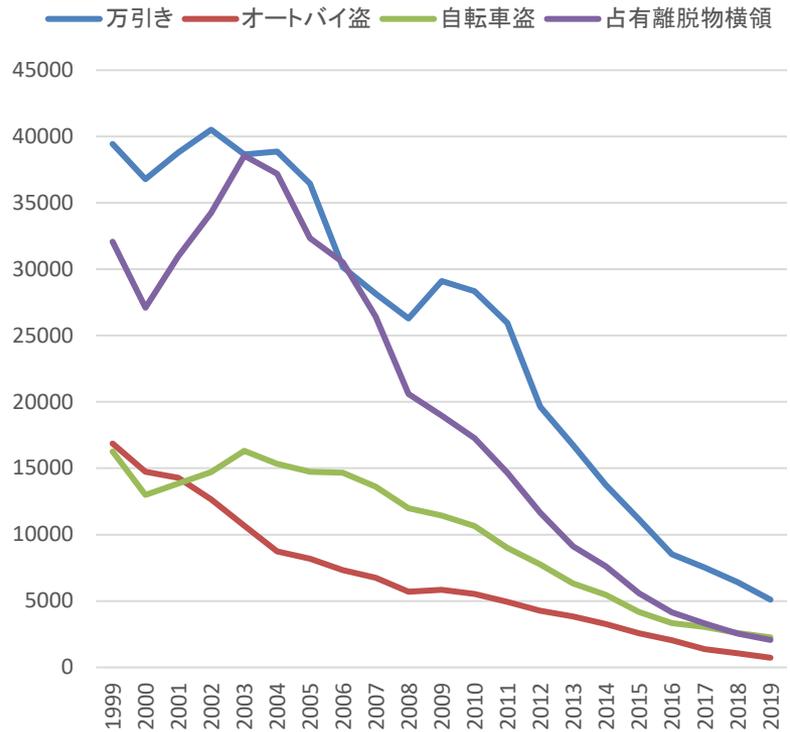


初犯・再犯の問題

再犯者率

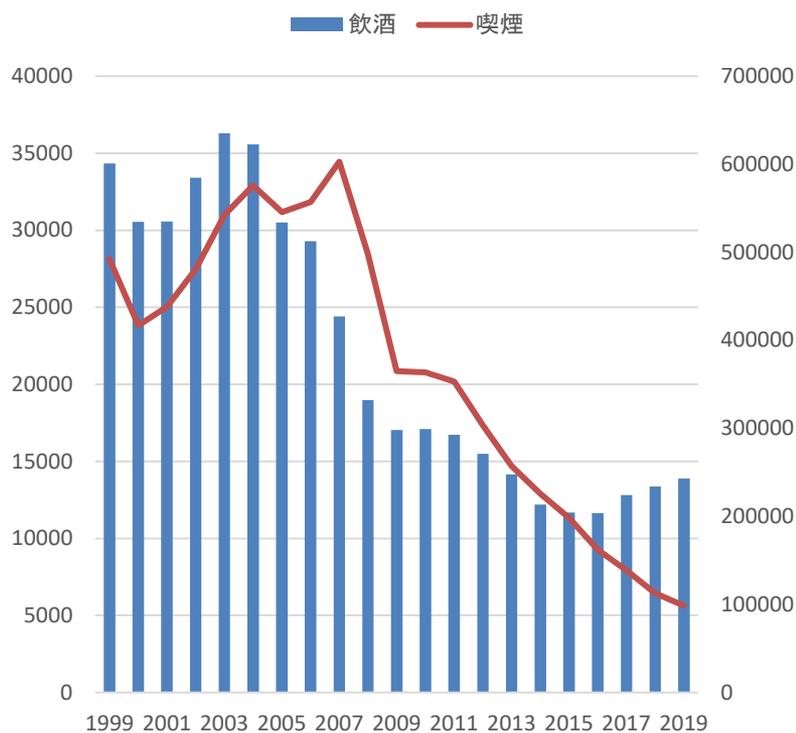


初発型非行

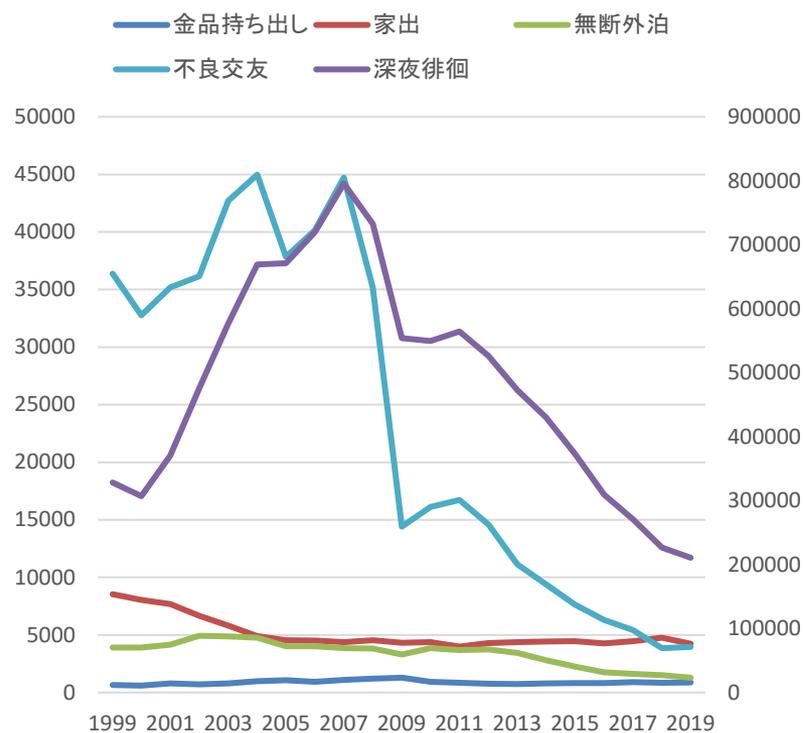


不良行為少年

飲酒・喫煙

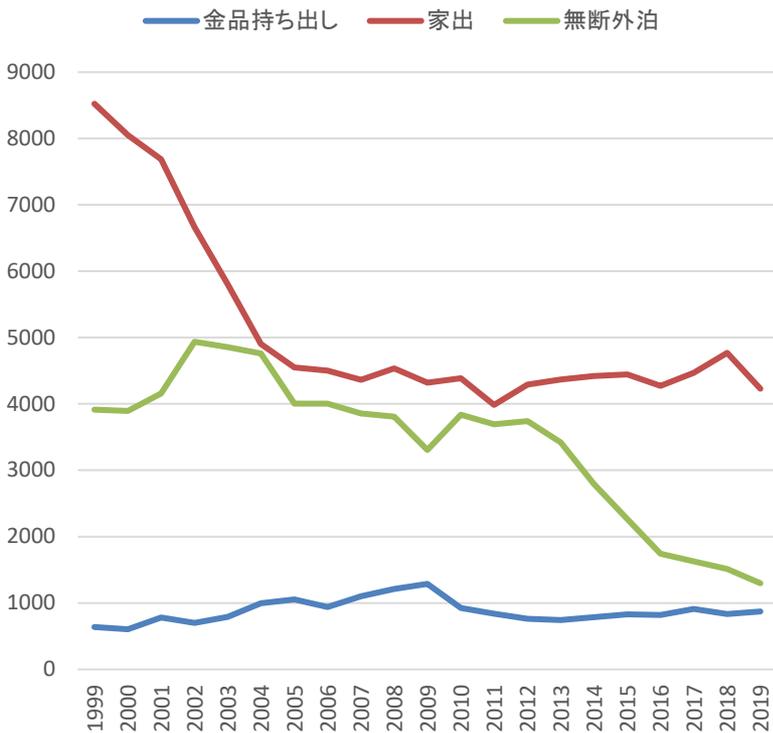


不良交友・深夜徘徊



不良行為少年

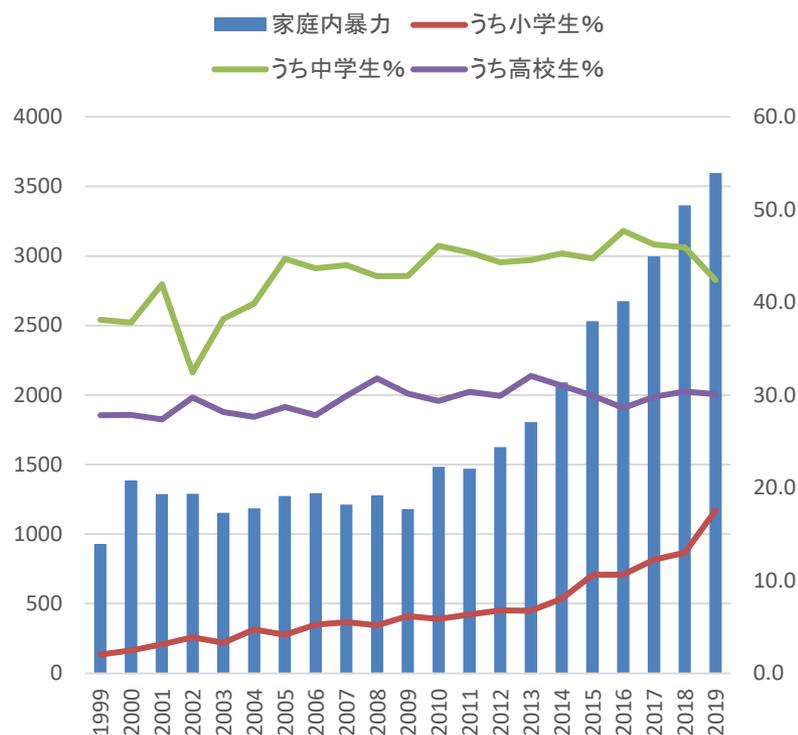
金品持ち出し・家出・無断外泊



- 問題となっていた非行の再犯者率も近年減少
- 非行の入り口とされる初発型非行、不良行為も不良交友の関連項目で減少
- 家庭内の問題は横這い

家庭内暴力

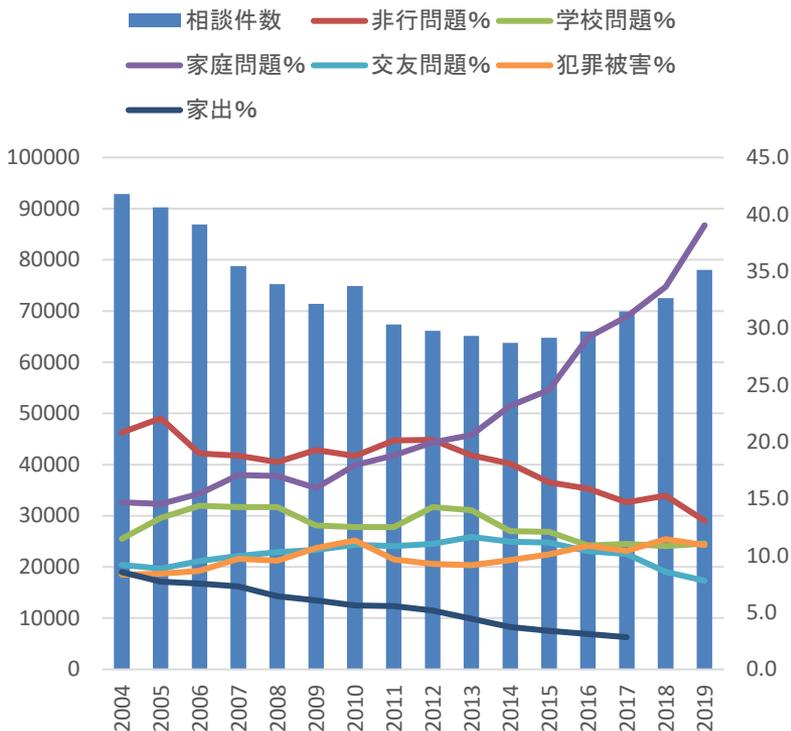
事案件数と学職別割合



- 家庭内暴力は近年増加傾向
- 特に、小学生による事件の増加が目につく

少年相談

相談件数と各種問題の割合



- 相談件数も近年増加に転じている

- 非行問題や家出が減少する一方、家庭問題が増加

→ 少年は家にいる

→ 家庭内における葛藤の増大？

非行集団、非行仲間の減少

- 共犯率の減少、街頭犯罪・暴走族の減少
- 深夜徘徊、不良交友等の減少
 - ← 対人コミュニケーションスキルの減少により、仲間関係の維持が不得手（岡部, 2010; 吉永, 2014）
 - ← 犯罪の知識・技術の学習機会の喪失、非行文化が伝承されない（ex. 暴力の加減）
（伊藤, 2015; 土井, 2013; 五百木, 2014）

衝動的な非行

- 暴行、校内暴力、家庭内暴力
 - ← 校内暴力、家庭内暴力の低年齢化
 - ← 感情コントロールの乏しい未成熟な行動
(岡部, 2010, 2015; 生島, 2014; 吉永, 2014)
- 強制わいせつ、性的問題行動
 - ← 痴漢、盗撮 (大原, 2020)
 - ← 心的苦痛やストレスからの加害行動 (大原, 2020; 宮口, 2019)

インターネットの影響

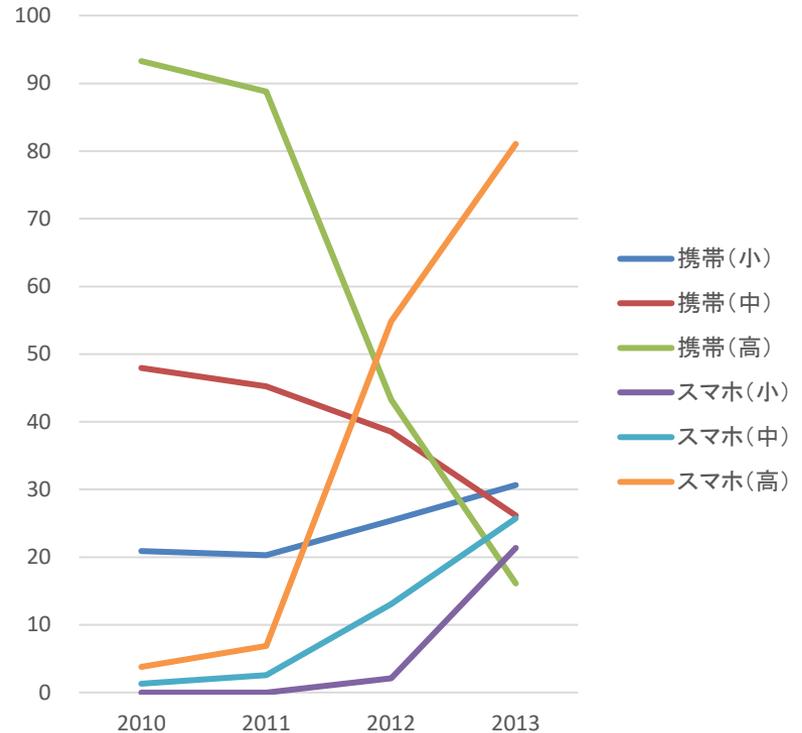
- 顔の見えない相手との接触
 - ← 特殊詐欺（受け子等）、児童ポルノ事犯の被害
 - ← 地理的境界の消失（松田, 2020）
 - ← 大人—青少年の境界の消失（岡部, 2010; 矢島, 2021）
- 有害情報への接触
 - ← 大麻事犯（大麻の有害性を否定する情報）
 - ← 性犯罪（性的コンテンツからの影響; 大原, 2020）
- 屋外の非行が減る
 - ← サイバー空間での問題行動（Miro-Llinares & Moneva, 2019）
 - ← 屋外での非行に代わり、家庭内の葛藤やネット上のトラブルなどの問題行動や被害が発生

インターネットの影響（続）

- 対面コミュニケーション機会の減少
 - ← 対人スキルの乏しさ（回避的、一方的）
 - ← 悩みを通じた対人関係、対面で心を伝える機会が減る

（五百木, 2014; 岡部, 2010; 吉永, 2014）

携帯電話・スマホの所持率
（内閣府調査より作成）



背景

研究者・実務家の指摘（H22～R3）

- 価値観の多様化
 - 世代間ギャップの縮小 → 対抗文化としての非行の変容（土井, 2013）
 - 仲良し親子
- 母子家庭の貧困
 - 保護者の孤立 → 養育力の低下（小長井, 2016; 久原, 2013; 岡部, 2015）
- スマホの普及
 - SNSによる凝縮した関係性によるストレス（ex. 伊藤, 2015; 岩宮, 2018; 矢島, 2019）
 - ストレス耐性の低い者は、はじかれてしまう

その他の問題

- 対人スキルの乏しさ、一方的なコミュニケーションや行動、衝動性、過剰な暴力等の指摘



- その背景にありうる問題
 - 発達障害
 - 虐待

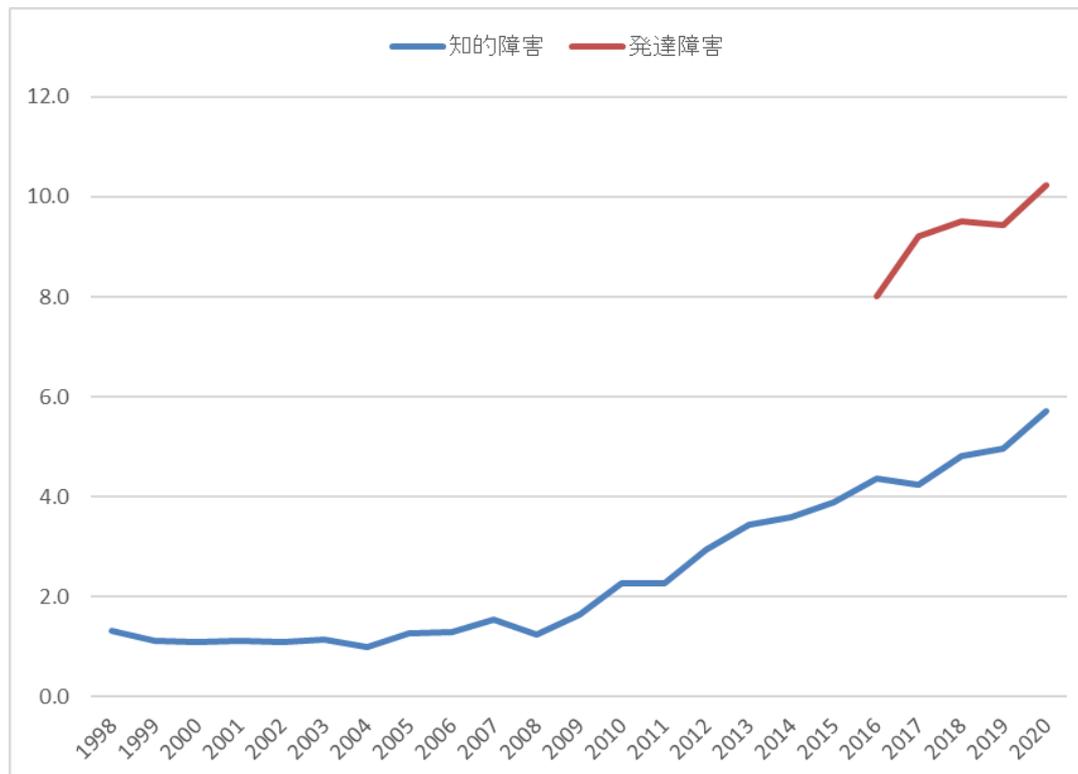
ただし、発達障害や被虐待経験を有する者が、必ずしも少年非行等の問題行動に至るわけではない。

発達障害

- 何らかの脳機能障害にて年齢に期待される発達課題を達成できでない（柘屋, 2015）
- ADHD（注意欠如・多動性障害）
- ASD（自閉症スペクトラム障害）
- ID（知的能力障害）

発達障害

- 少年鑑別所新収容者における知的障害、発達障害の割合（矯正統計年報より作成）



発達障害

- ADHD

- 不注意、多動性、衝動性が特徴（12歳未満で発現）



- 集団生活の中で適応不全
- 衝動コントロール未熟 → 短絡的に暴力行為

- ASD

- コミュニケーションや情緒的疎通性等の対人相互的反応の障害

- 限局された興味・関心への没頭・こだわり・反復



- 社会性・共感性欠如、興味関心の偏り、思考・行動様式へのこだわり、想像力の欠如、問題解決能力の困難

（安藤, 2016; 十一・天野, 2009より）

発達障害

- ID（知的能力障害）
 - 特に、境界知能（IQ71～84、DSM-IV-TRによる）のケース
- 人口の14%
- 健常者と見分けがつきにくい
 - 柔軟な対応が苦手、困ったときに健常者との違いがでる
 - 支援が必要でないと誤解され、本人も普通を装い、支援を拒否したりする

（宮口, 2019）

発達障害と非行 (柘屋, 2015より)

- 犯罪・非行に至る危険因子は・・・
 - 発達障害そのものではなく、
 - 周囲の不適切な対応や支援

社会的孤立、情緒的つながりの欠如

家族からの虐待、過度の叱責

いじめ

- 二次障害に至る流れ
 - 障害特有の行動特徴
 - 社会的評価の低下
 - いじめ、虐待、過度な叱責
 - 自己評価の低下
 - 他者や社会への不信

↓

 - 抑うつ、不安
 - 暴力、反社会的行動、不登校、ひきこもり

虐待

- 非行少年の被虐待経験
(身体的、心理的、ネグレクト、性的のいずれか)

調査	サンプルサイズ	経験者率
検挙補導された少年13-19歳 (科学警察研究所, 2007)	N=902	全体25.3% 男子22.0%、女子36.2%
少年院入所者13-19歳 (法務総合研究所, 2014)	N=799	全体20.7% 男子18.6%、女子39.7%

トラウマモデル (Ford et al., 2006)

- 心理的トラウマへのコーピング (対処行動)

「生存者コーピング」

傷つき、怒り、絶望、不信、空虚感

「被害者コーピング」

安心と自己コントロール感の回復のための防衛的対処

→他者への無関心

→反抗・攻撃的態度

トラウマモデル (続)

- 2つの問題

情動コントロール

恐怖や怒り
→ 行動化、解離

情報処理
(思考・判断)

社会的手がかり
敵意の投影

→ 自尊心低下

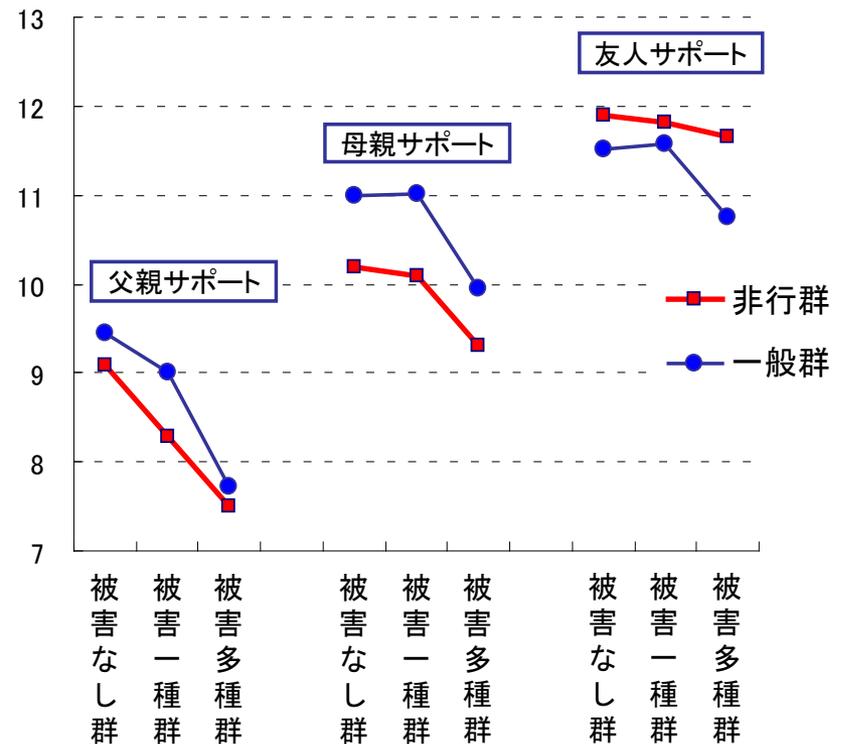
→ 対人関係の見方の歪み、対人不信

→ 問題行動、反抗的態度

ソーシャルサポート

- 大人は物理的安全と心理的安心を提供できる
- 安心して受け止めてくれる大人と、トラウマ的体験やそれにまつわる感情を話す機会が、不安や抑うつを低下をもたらす
- 非行少年は大人のサポートを得にくい

父、母、友人からのサポート得点
(科学警察研究所, 2007)



実行機能（Executive Function）

- 「将来の目標達成のために適切な構えを維持する能力」とされる高度な認知過程（福井, 2010）
 - 目標設定、計画立案、計画実行、効果的遂行
注）心理学では概念定義の議論が続いている
- 発達障害の多くが**実行機能に困難**（李, 2020）
- 被虐待経験者は有意に**実行機能が低い**（DePrince, 2009）
 - 厳格体罰→実行機能と関連する脳部位の容積減少（友田, 2011）
- 非行の背景にみられる**実行機能の弱さ**
 - 実行機能不全→低い自己統制力→非行（Altikriti, 2021）
 - メタ認知の向上が非行の処遇に重要（大江・亀田, 2015）

介入は早い段階で

- サインは小学生の段階から出ている（宮口, 2019）
- 実行機能の脆弱性による二次障害を防ぐために、早期の介入が必要

例えば・・・

- 不注意症状（DSM-5児童・青年期診断面接ポケットマニュアル）
 - 細部を見落とす
 - 課題への不注意
 - 聞いていないような態度
 - 課題を達成できない
 - 課題を計画的にできない
 - 長時間の集中力を要する課題をよく避ける
 - 課題に必要な物をよくなくす
 - 容易に気が散る
 - しばしば忘れやすい

情報収集： 児童・生徒に対する聴取

- 司法面接（Forensic Interview）
 - 犯罪等の被害に遭った子ども、犯罪を目撃した子どもから、事実を聴取するための面接
 - 子どもを誘導せず、正確な記憶をより多く引き出す
- 質問の種類
 - オープン質問（自由再生質問）
 - 焦点化質問（WH質問）
 - クローズド質問（選択式質問、はい・いいえ質問）
 - 誘導質問
- 問題行動が発生したときの状況把握などの際、加害者、被害者、目撃者から個別に聴取する際に有用